多文化との共存：教える喜び

Graciela CRAVIOTO*

退職を目前にして振り返ってみますと、私の人生には思いがけない浮き沈みがあったことに改めて気づきました。今後、大きく変わるかもしれませんが、これまでの学問との関わり、そして私自身が経験した中で、今回は、教育と多文化についての足跡について記したいと思います。

教える喜びと目的

私は高校生時代に、近所の人や母の友人の子どもたちから「数学を教えてほしい」と頼まれて、喜んで教えていました。なんとか理解してもらい、子ども達が数学への苦手意識を少しずつ払拭して行く姿を見て教えることの楽しさを覚えました。以来自分は、教えることが好きなのだと気づき、生涯教えることが仕事となっています。

当時は、勉強に興味がなく、大金を払って予備校に通っている生徒に教えたことがありました。結果的に学力がない生徒の合格に、学問のすすめ方について疑問を抱き、教える目的や意義について自問し、私の教育者としての歩みを確立するきっかけとなりました。

メキシコの国立自治大学時代

大学１年生の時、学校を中退した大人のために、数学を教える機会がありました。これはとても面白い経験でした。私は教室で最年少にして、数学の先生でした。そんな私が、彼らに教えるということを受け入れてもらうのに苦労をしました。私をからかう生徒もいれば、眠ってしまう生徒もいました。しかし、純粋に学びたいと思っている生徒がいることが救いでした。その中の一人は、空手選手として、他の生徒たちに一目置かれていました。そんな彼が他の生徒に、二度と、からかうこと、寝たりしないようにと言ってくれたのです。不思議なことに、その後は雰囲気が一変し、ようやく授業ができるようになりました。生徒の中には数学が好きになり、高等学校の卒業資格を取り、より良い生活を送る人もいました。

大学３年生からは理学部の教授の助手になりました。数学に熱心な学生に教えることは魅力的でした。代数学、幾何学、微分積分、ゲーム理論などを学び、教えました。ゲーム理論の応用を追求するうちに、経済学にたどり着き、大学院経済学研究科に入学しました。他の学部からの入学であったため、経済学基礎科目の修得が必要でしたが、同時期にミクロ経済学の教授の助手にもなりました。このようにして幅広い指導経験を積むことができました。

日本への道

理学部と経済学部で数年教鞭をとった後、数学と経済学の両方に繋がるゲーム理論に魅了され、日本の経済に興味を持ちました。そして数理経済学分野の第一人者であった, 宇沢弘文氏のもとで勉強をしたく、日本語学習を始めました。その後、日系人とのロマンスを経て、当時、私の日本語の先生でもあり、信頼を寄せていた方に励まされて、日本留学を真剣に取り組むことになりました。その後、文部科学省からの奨学生として、来日することになりました。

*鳥取大学教育支援・国際交流推進機構教育センター　准教授

異国で学びながら教える

１９８７年４月に初来日し、再びフルタイムの学生になりました。その後、スペイン語会話の個人レッスンや大阪の専門学校で、英語での数学のクラスで教鞭をとりました。そんなある日突然、「大学でスペイン語を教えてみませんか？」という電話がありました。承諾したものの、次の問題が頭に浮かびました。“言語ってどう教えるのだろう”、母国語であっても、外国語として教えるためのノウハウを持っていなかったのです。生徒たちの問いは、私自身の疑問になり、私はそれらを解決するために何時間も費やしました。つまずいては学び直し、教え、学び、少しずつ形になりました。そして本格的に教え始めました。

博士課程後期の勉強と同時に、私は、数多くの大学でスペイン語を教えました。対象にはスペイン語専門の学生もいれば、第二外国語で履修している学生、ほとんど興味のない再履修の学生を受け持つこともありました。更には言語以外に、ラテンアメリカの経済と文化について教える機会もありました。その後、東京外国語大学の客員教授となり、スペイン語学科で、スペイン語を主なツールとして使用する学生に教えました。

日本で外国人として生活すること

当初は大学院生として数理経済学を数年学び、メキシコに戻る予定でした。しかし、日本は私を魅了し、今日に至っています。外国人である私は、日本で思ったことや、やりたいことが出来ているとは限りません。

日本にいれば、私はいつも「メキシコの看板」を背負っています。私の行動がメキシコ人の行動と見られるからです。私の外観を物珍しく思う人に、街中で“外人”と指さされることもありました。先入観からか、外国の食べ物は臭いだろうと、アパートの入居を断られたこともありました。グローバル化も進み、現在では偏見も減りましたが、結婚した際には、入国管理局で「第三世界の国から来て、売春婦として働くために結婚したでしょう」と言われ、ショックを受けました。この経験があったから、差別をなくすために努めなければならないと思っています。

メキシコへの帰還

日本で１５年間過ごした後、私の人生に大きな転機がありました。家族と一緒に４年間メキシコで暮らしたことです。日本の文化を吸収して帰国すると今度は、母国で「日本の看板」も背負うことになりました。

日本の会社から、メキシコでメキシコ人の人材育成プログラムの設立を担当するため、人事部門で働かないかと誘われたのです。新入社員に会社の哲学を教えることから、中堅のマネージャーに５Ｓ（整理、整頓、清掃、清潔、しつけ）や改善などを、課長と部長には経営、管理、リーダーシップに至るまでを指導し、また、従業員向けの英語教育プログラムの実施も担当しました。その後、多くの日本企業と日本コミュニティが存在する別の街に移りました。そこで日本人のマネージャーとその家族にスペイン語を教えました。また、小学校や市の工科大学で学生に日本語と日本についての教鞭をとりました。その後、再び日本に戻る時期が来ました。

鳥取での生活

私が初来日してから１９年が経っていました。学生、社会人として過ごした１５年間、後のメキシコでの４年間、そして最後のステージは鳥取です。日本に再び戻ったとき、運命が私を鳥取に連れてきました。「砂丘があること」、「日本人にもあまり知られていないところ」この二つが私の持っていた情報のすべてでした。

小学校３年生の娘と小学１年生の息子とともに鳥取に引っ越してきました。生活の中で、私は子どもたちを守り、差別のない暮らしを強く意識しました。毎年小学校に出向き、メキシコをはじめ、世界の国々について、そして文化の違いについて講演をしました。子どもたちに、国際結婚の子は「ハーフ」ではなく「ダブル」であるという考えを少しずつ伝えてきました。子どもたちは、他の国や外国の食べ物などに、少しずつ興味を持ち始めてくれました。学校では児童たちが私に近づき、たくさんの質問をしてくれました。私の子どもたちは、あまり特別視されなくなったように感じま

した。
私の娘はピアスをしています。それは不良の象徴ではなく、メキシコの重要な文化的伝統であることを説明し、擁護する必要がありました。これは一例に過ぎませんが、このようにして私たちは一歩ずつ前進して、鳥取で生活をしています。

鳥取大学での教育

この物語の最終章は、偶然、鳥取大学の教授であった隣人と話していたところから始まります。私は、鳥取大学で１４年間教えてきました。４年間の非常勤講師を経て、准教授となりました。
大学ではレベル別のスペイン語クラス、会話や読解などの英語クラス、メキシコとラテンアメリカのゼミ、オムニバス形式で日本事情を主に受け持ちました。メキシコ海外実践教育プログラムで学生を指導し、メキシコに連れて行き、メキシコの留学生を日本で支えて、交流を支援しました。また、最近の５年間は、放送大学の鳥取学習センターの客員准教授として、その他、スーパーグローバルハイスクール（SGH）プロジェクトの一環として、高校生に、持続可能な開発目標（SDGs）、フェアトレード（Fair Trade）、メキシコとラテンアメリカについて英語または日本語での授業も行いました。
准教授に就任してから、小学校での活動を継続するため「世界を知ろう」プロジェクトで、外国人留学生に自国の文化を語ってもらい、子どもたちと交流をしました。また、大学開放推進事業として、「ラテンアメリカを知ろう」を開設しました。これらのイベントの目的は、誰もが自由に参加し、発言し、他の人の意見を聞くことができる機会を作ることでした。これまでに、ラテンアメリカとカリブ海諸国の歴史、文化、社会、経済など、幅広い分野についての意識を高めるため、計２０回のイベントを開催し、可能であれば、今年度も開催したいと考えています。
このようなイベントを通して、文化は違っても共通点がどれだけあるかを学び、自国の文化を新しい視点から見ることができると考えます。年々イベントの情報は口コミで広まり、友情と調和の雰囲気の中で、たくさんの方々に喜んで参加いただき、外国人と日本人がお互いをより良く理解し、住みやすい鳥取への一歩を踏み出していると信じています。
また、メキシコと日本の看板を背負いながら、両国の架け橋になり、差別のない社会を目指して多文化教育に努めています。

大学教育年報第２３号には、２０１２年度から２０１７年度までのこれらの活動の英語の報告があります。２０１８年と２０１９年の４つのイベントのポスターです。

共有するものと学ぶべきことが常にある

決して容易ではない波瀾万丈の人生でしたが、出会った一人一人の学生と同僚から、私は多くを学びました。様々な国で様々な科目を教えてきました。異なる経済状況に、バブル、バブル崩壊、経済回復、リーマンショック、そして現在のパンデミックなど、社会は特殊な状況に直面しています。多様な年齢、興味、能力、ニーズを持つ学生に教えるために、私は自分自身を再発見し、何を、どのように、そしてなぜ教えるかを吟味しなければなりませんでした。それらのユニークな体験を経て、日々どんな学生にも何かの形で貢献できるようになったと思います。

旅の仲間

この長い旅の間、私と一緒に人生を過ごした、多数の仲間がいました。その一人一人が近く、または遠くから支援と友情の手を差し伸べてくれたお陰で、私はここにたどり着くことができたと思っています。先ずは、「２年間日本に行って来る」と言って出かけたまま帰らない私に、今でも文句を言っている最愛の母、いつも私の心にいる父、もっと一緒に過ごしたかった私の兄弟、メキシコと日本の親戚、世界の友人、恩師、同僚、同級生や学生、そしてもちろん、私の夫、娘と息子、皆に心より感謝しています。

http://www.journalmex.com.mx/20oct2018

退職

日々、私の心は二つの国の間で分かれていて、私の頭には常に三つの言語があります。６５歳になった今年、退職を機に人生が一変することでしょう。これから、どんな所で、誰に、何を教えていくのか、どのようにして日本とラテンアメリカの架け橋であり続けるのか、世界がより良くなるための貢献ができるのか、今はわかりませんが、人生が許す限り、私は自分の目標に向けて努力し続けていきます。